

6.2.4 調査・設計・施工技術報告会部会報告

調査・設計・施工技術報告会部会 委員長 小高猛司

調査・設計・施工技術報告会（以下、報告会）は、中部地盤工学シンポジウムと並び毎年開催する中部支部の最大イベントであり、今年で第27回目となった。初回の26年前と言えば、筆者はまだ博士課程の学生であったが、当時40代半ばであった師匠の浅岡顕先生やその同年代の名工大の中井照夫先生、岐阜大学の岡二三生先生らが中心となって支部を運営しておられた頃であり、先生方をはじめとした先達の皆様の本報告会に込めた熱い思いというものを、四半世紀経った現在、部会の委員長を拝命した筆者も強く感じることができる。地盤工学会の存在意義のひとつは、学問としての地盤工学を現場の技術に結びつけることであると思うが、日々、調査、設計、施工そして維持管理の実務に取り組まれている技術者の会員が活発に意見交換できる場が必要不可欠である。そのため本報告会は、学会員が所属機関の最先端の業務事例を持ち寄って報告し、活発に議論するスタイルを発足当初から継続してきている。報告会は年1回開催すること自体が重要であることは言うまでもないが、名城大赴任以来12年間にわたって部会に携わってきた筆者からみて、この部会は報告会のための単なる作業部会ではなく、学会の存在意義を体現する重要な組織であると常々思っている。部会の構成員は、地質調査業、建設コンサルタント、建設業、鉄道、自治体そして大学と多くの会員が参画し、毎年の報告会を造り上げる作業を通して、業界を超えた交流関係を構築している。報告会後の懇親会も重要な行事であり、通常総会の懇親会と並んで支部会員が交流する場を提供している。また、通常の委員会においても、会議後には場所を変えて意見交換する場を設けることが、普段は仕事のない委員長の最大の職務と筆者は考えている。



第20回記念大会(2011.6 名城大にて)

さて、創立60周年にあたり、この10年間を振り返る。平成21年度までは三浦均也先生が委員長を勤められ、以降は任期3年とし、平成22～24年度は前田健一先生、平成25～27年度は杉井俊夫先生、そして平成28年度から今年度まで筆者が部会委員長を拝命している。先述のように、本部会には幅広い業界から錚々たる委員が参画し、いわば支部活動の縮図となっており、筆者は常日頃から身の引き締まる思いであり、単なる作業部会にしてはならないと肝に命じている。この想いは、歴代委員長（少なくとも前のお二人）も同様である。委員長こそ大学人があたってきたが、2～3名と定める副委員長は各業界の方をお願いしており、実質的に本部会を引っ張っていただいている。白木敏和氏（中日本建設コンサルタント(株)）、森富雄氏（(株)アイエスシー）、安藤登氏（東邦地水(株)）、垣見年和氏、中島将貴氏（いずれも(株)大林組）、法安章二氏（玉野総合コンサルタント(株)）、服部裕信氏（(株)熊谷組）、この10年間は以上の方々であるが、安藤氏、白木氏、森氏の3氏は、永年の支部活動（特に本部会での中心的活動）への多大な貢献が認められ、中部支部賞（功績賞）を受賞されている。心から謝意と祝意を表したい。

平成23年の第20回記念大会は、前田委員長の下で前年から中部の防災をテーマと定めて準備を進めていたが、3月11日に東日本大震災が発生したことも重なり、大盛況の下に成功裏に終わった。また、この報告会が永年会場としてきた名城大学での最後の開催となった。40過ぎて会場係として準備や運営に走り回らなければならない裏方の仕事は若干大変であったが、学会活動に汗を流す指導教員を横目に見ながら仕事を手伝う研究室の学生達は、自校で開催する誇りを自覚して働き、教育効果は高かった。名城大学で開催しなくなり、若干残念で寂しい思いもあるが、平成24年以降会場としている名古屋大学ESホールは、施設が素晴らしく、交通の便も良いために参加者には大変好評である。今年から利用料が高騰したことが気付きであるが、当面は継続して利用することになるだろう。

本報告会には、各業界から部会員として多数の人的資源をご提供いただいていることは先述のとおりであるが、建設コンサルタンツ協会中部支部と中部地質調査業協会（五十音順、敬称略）には毎年協力金のご支援もいただき、各団体の代表の方には、隔年で報告会の閉会挨拶もご担当いただいている。本報告会は、まさに産官学の協力の下で成り立っている地盤工学会中部支部の活動の象徴的な事業である。筆者も50代となり、我々の師匠がそうであったように、支部活動のバトンを次代に渡す年代となった。本報告会を造り上げた師匠達の熱いマインドを、次代に確実に引き継ぐことが、委員長として最後で最大の職務であると思っている。支部会員各位におかれては、次の十年も調査・設計・施工技術報告会が継続して盛会を続けられるように、ご協力とご支援を節にお願いする次第である。